

樹海

Readers make leaders!

発行日：令和四年六月三十日

発行者：北海道旭川北高等学校図書委員

青葉若葉の候、最近気温が高くなり、学校祭も近づき、身体がバテてくる時期となりましたが、皆さんはいかがお過ごしでしょうか？

「ジメジメしてて、肌にまとわりつくような暑さが嫌！！」そんなことを思う皆さんに涼しさを提供すべく、今月の樹海ではホラーやミステリーというようなジャンルの本をご紹介します！！ぜひ、一度手に取って涼しくなってください！！！！！！！！！！

北海道みんなの日プロジェクト



～北海道みんなの日プロジェクトとは～

7月17日は、「北海道みんなの日」(愛称「道民の日」)です。北海道の魅力と価値を再発見し、北海道を誇りに思う心を育み、より豊かな北海道を築き上げることを期する日です。

北高図書室では道内出身の作家や北海道の地名が出てくる作品を巨大な北海道地図とともに紹介しています。紹介されている作品はすべて図書室にあるものなので、ぜひ手に取ってみてください。7月ごろから図書室前の掲示板に貼る予定です。お楽しみに！

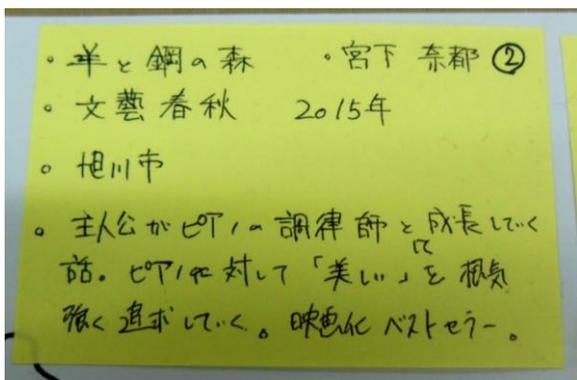


↑ 巨大な北海道地図が図書室に出現

今回から3号に分けてその内容を紹介していきます！！第1弾は「道北」

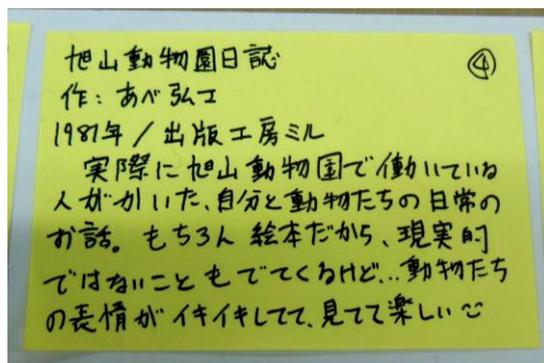
「羊と鋼の森」

作者：宮下奈都



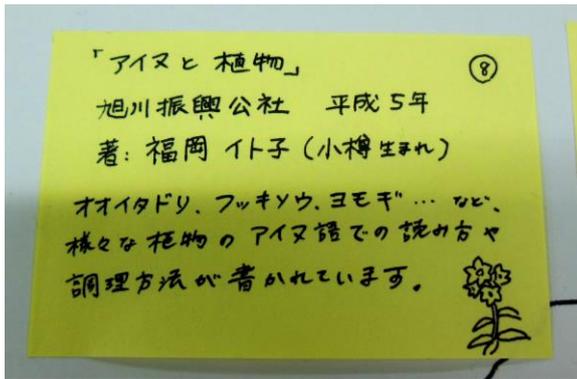
「旭山動物園記」

作者：あべ弘士



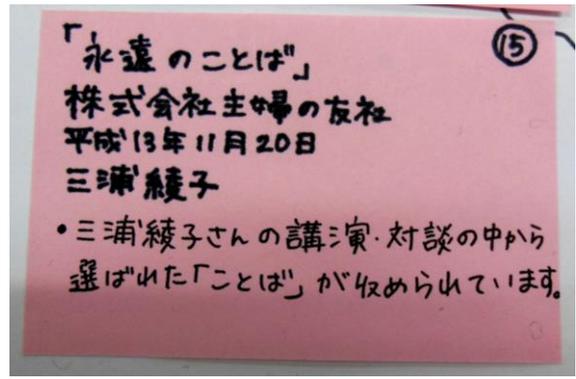
「アイヌと植物」

作者：福岡イト子



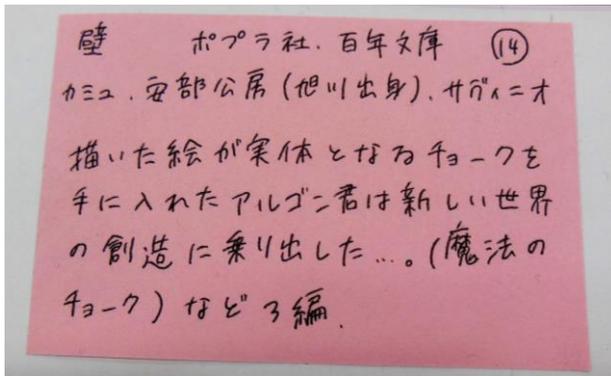
「永遠のことば」

作者：三浦綾子



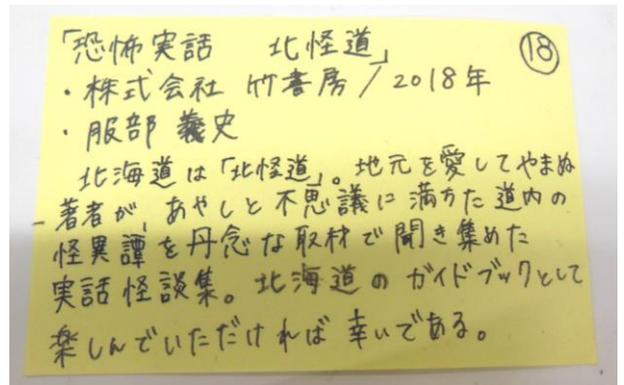
「壁」(百年文庫)

作者：安倍公房



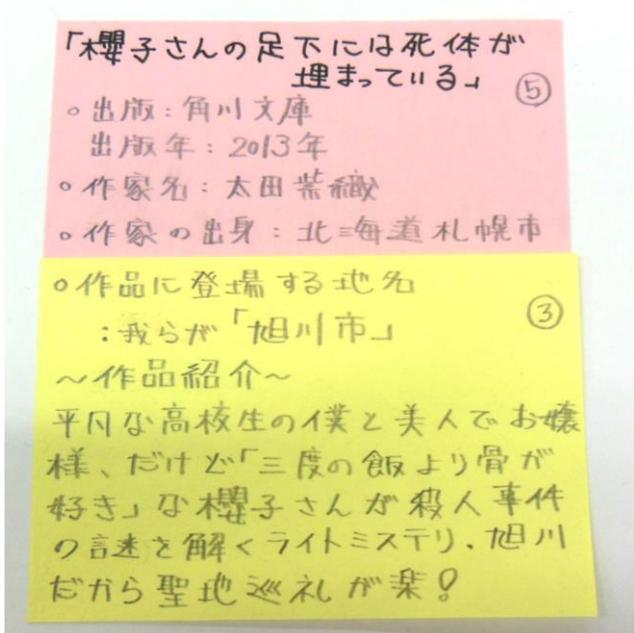
「恐怖実話 北海道」

作者：服部義史



「櫻子さんの足元には死体が埋まっている」

作者：太田紫織



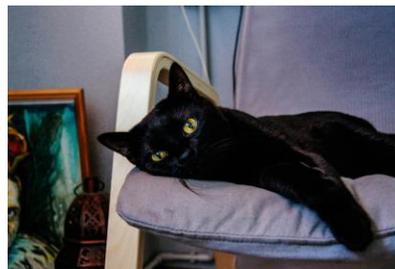
ここで紹介した本はまだほんの一部です。ぜひ図書室に来て巨大な北海道地図を見に来てください！



☆裏面の図書委員のオススメもぜひご覧ください。⇒⇒⇒

「黒猫／モルグ街の殺人」 作者:エドガー・アラン・ポー

2006年 光文社



推理小説、SF、ホラーなど、幅広いジャンルに作品を残したポー。しかし、彼の人生は常に貧困に苦しめられていました。また愛妻を病気で失い、酒に浸り、40歳という若さでこの世を去っています。「黒猫」に登場する主人公は、大酒飲みでポーの持つ性質も持ちあわせています。波乱に満ちた人生を送ったポーと作品を重ねながら読むのも暑い季節に涼しくなりたいという方におすすです！！(R.O)

送ったポーと作品を重ねながら読むのも暑い季節に涼しくなりたいという方におすすです！！(R.O)

「ためしに怪談きいたらやっぱり幽霊いるし怖すぎた。」

編者:エブリスタ 2017年 竹書房

国内最大級の小説投稿サイト、エブリスタで開催された史上最恐の<リアル怪談コンテスト>。応募作 558 編の中から「これは洒落にならない！」という優秀作 24 編が収録されています。一般人からの投稿のため、怖さにばらつきがあり、怖い話ばかりでなく、不思議な話も多くあります。特に、大賞を獲った「私と彼女とあの女」、準大賞を獲った「友達が事故物件に住んだときの話」は読んだ後に背筋がゾクゾクとするのでオススメです。勉強の合間(特に夜中)の休憩時間のお供に、どうぞ...。(J.I)



私に取っただけで涼しくなる本特集

「むらさきのスカートの女」 作者:今村夏子

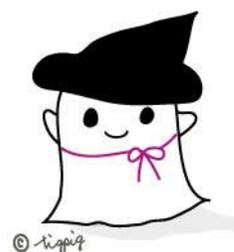
2019年 朝日新聞出版



近所に住む「むらさきのスカートの女」と呼ばれる女性が気になって仕方のないわたし。なんとか「ともだち」になるために、自分と同じ職場で彼女が働き出すようこつこつ小細工を重ね、努力の甲斐あって無事、同僚に。しかし、職場での彼女はどんどん新しい顔を見せ全く友達にはなれない。それでもわたしは変わらず彼女を追わずにはいられない。ある日の事件をきっかけにとうとう仲良くなれると思いきや...

(S.M)

「作者不詳 ミステリ作家の読む本」 作者:三津田信三 2010年 講談社



「迷宮草紙」なる奇妙な同人誌を手に入れた「三津田信三」とその友人が、本を読み始めるにつれて怪奇現象に見舞われはじめるようになる。この同人誌「迷宮草紙」の本文にあたる短編集の部分と「三津田達」を描く部分に分かれており、「三津田達」を描いている部分は、かなり不気味で恐ろしい感じがします。作品のなかで、雰囲気を表す表現が非常に上手であり、読んでいてこっちも怪奇現象に巻き込まれてしまいそうな、そんな気分になってしまうような一作となっています。(Y.H)



読んでいてこっちも怪奇現象に巻き込まれてしまいそうな、そんな気分になってしまうような一作となっています。(Y.H)

「ねじの回転」 作者:ヘンリー・ジェイムズ 訳:土屋政雄 2005年 東京創元社

とある夜、何人かの人々で互いに恐ろしい話を語っていた。その中で最も恐ろしかったのは「ダグラス」のお話だった。彼がかつてとある女性から受け取った手紙に書かれていた凄惨な物語である。その物語は、主人公の「私」が家庭教師として雇われるところから始まる。両親を亡くし、イギリス郊外の古い貴族屋敷に住む美しい兄と妹のもとで共に暮らすことになった「私」。素直で美しい二人に夢中になっていく「私」だが、兄妹を悪に引きずりこもうとする幽霊を目撃してしまう。子どもたちを守るため「私」にしか見えない幽霊に立ち向かい正体を探ろうとするが...



本当に幽霊は存在するのか? 「私」こそが幽霊なのでは? 読者をも幽霊屋敷に引きずりこむような不安定感と恐ろしさを味あわせる戦慄の物語。暑い夏も背筋が凍るようなこの作品とともに乗り越えましょう!(S.I)

「クリスマス・キャロル」 作者:ディケンズ 2006年 光文社

守銭奴であるスクルージが、クリスマスイブに盟友ですでに



亡くなっている、形が定かではないマーリーの亡霊が現れる。マーリーに家にあと三人の精霊がいるといわれ、予言通りあらわれる。そして自らのつらい過去と対面することになり、最後には自分の未来が知らされることに...。いったいどんな未来を見ることになるのか。クリスマスは季節外れですが、夏にぴったりの涼しくなる話です!是非読んでください!!(R.H)

